

三谷慎《朔太郎像》1993年

五・七・五の定型韻律の制約から詩を解放し、近代口語自由詩の地平を切り拓いた『月に吠える』の萩原朔太郎。誰もが知るこの詩人の像が、彼の散策エリアであった広瀬川沿いの前橋文学館にある。1993年、開館の年に三谷慎によって制作された。

三谷彫刻の特徴でもある、量塊を感じさせないその瘦身は、着物に隠れていることとも相俟^まって、詩人の繊細な五感と腺病質とを表出させているようにも見える。しかしおそらくこの像の美しさは、ほっそりとした体軀^{たいく}よりもむしろ、あごに添えた右手から来ているように思う。自分の顔に触れること。なるほど、広告写真等で幾度となく反復されてきたクリシェとして、自分の顔に触れる女性の煽情的なポーズ^{せんじょうてき}というものもあり、その媚態の定型が度々批判されてきたことも周知のとおりである。しかし、ここでの姿態はそれとはまったく別のものだ。他者の視線に構わず、外向きに作った表情を解き、自らの内に沈潜している詩人の無意識が、この手に生々しく露呈しているのである。放心し自分自身を忘却し、知らず知らずのうちに自分の顔に触れているこの姿態によってこそ、神経症的な官能性をたたえたあの詩篇の作者の核が、余すところなく表現し尽くされていると言っていい。もっとも、この像の迫真性が実際の萩原朔太郎その人と必ずしも一致するものでないのは、もちろん言うまでもないことである。

もうすでに生前の姿を知る人はなく、残された写真から立体を起こすのは、並大抵の作業ではなかったはずだ。制作の参照項として、三谷は、朔太郎40代の写真イメージを選んだ。若い頃よりも顔の各部位がはっきりと際立ち、詩から受け取られる印象にもっとも近かったからだという。また写真はサイズの伸縮を特徴とするため、それをもとに体軀の大きさを捉えることは難しく、生前に着用していた着物と履物からそれを想像した。こうして制作された朔太郎像には、年に一度、三谷の手によって真鍮のワイヤーブラシとワックスがけが施され、制作当時のままの魅力を放ちつづけている。

